

令和七年三月号

《第一四七号》

しるへび

宗教法人岩國白蛇神社

〒740-0017

今津町六丁目4-2

☎ 30-3333

弥生の祭典・行事案内

【月次祭】 九時半

一日(土) 己巳の日

二五日(火)



三日(月) 桃の節供

五日(水) 啓蟄

一七日(月) 彼岸入り

二〇日(木) 春分の日

春季皇霊祭

二三日(日) 彼岸明け

【昭和天皇御製】(第一二四代)

若草

もえいづる春のわか草よろこびの
いろをたたへて子らのつむみゆ

(昭和二十五年)

祝

昭和改元百年を迎えて

【節分祭】 二月二日 午後三時

氷雨のそぼ降る中、約五十名の参列を得て蔵重権禰宜を齋主に節分祭が斎行されました。巳年の今年には例年になくたくさんの方の参列があり、数名の方には参列をお断りするほどでありました。祝詞奏上に続き、拝礼後には「福豆」を授与しました。その間齋主は四方への



豆撒き神事を行ひました。参列者も境内にて待機し、四名の巳年生まれの方に豆撒きのお手伝ひをして頂きました。参列した方々を始めた数多の人々の無病息災を願ふばかりでありました。

【紀元節祭】 二月十一日

朝の厳寒の中、十四名の参列を得て令和七年の紀元祭が斎行されました。今年も光



洋流吟道の「名槍日本号」が奉納され、その力強い吟唱には毎回感動します。今年には昭和改元から百年と戦後八十年の節目の年に当たり、宮司からは未だに政府主催による建

国を奉祝する催しがないことは、「諸悪の根源」とも言へる現憲法にあるのではないかと、と言ふ挨拶がありました。

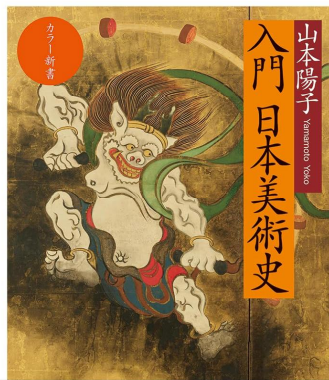
【推薦図書】

『入門 日本美術史』

ちくま新書

山本陽子著 千三百円＋税

『・・・想像してみてもいい。一〇〇年、いや五〇年後を。現在、巷に出回っている作品のうちで、一体どれが美術として残っているだろうか。ひよっとしたら、今はまだ美術の範疇にさえ入れられていないかもしれないマンガやアニメやフィギュアが、この時代の日本の代表作として教科書に載っているかもしれない。何が(美術)かの基準だって、時がたてば変わるかもしれないのだ。だったら、今のあなたにとっての美術を大切にしたい。評論家や美術史



こんな授業が
受けたかった
外来文化の流入★独自の熟成
日本の美術は
面白すぎる!

筑摩書房 定価 1430円(10%税込)



ちくま新書は
創刊30周年

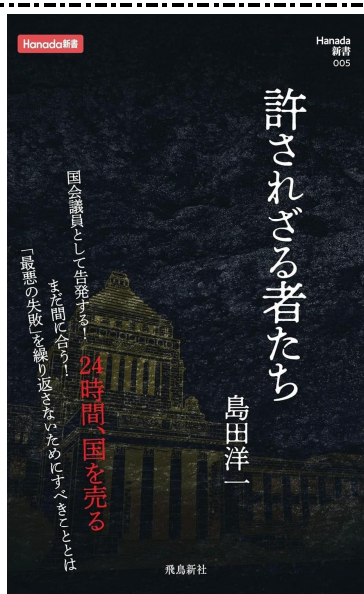
家の言葉によるのではなく、あなた自身が「どうして？」という疑問と好奇心を抱いて、いろいろな作品に接してみてもいい。ひとつでも「いいな」とか「これはすごいな」とか思える作品に出会えたら幸せだ。それはあなたが自分で見つけた美術なのだ。そうやってあなたにとっての美術を

増やしていったほうがいい。
『へおわりに 現代美術―あなたにとっての美術より』

『許されざる者たち』

飛鳥新社
島田洋一 著 一〇八九円

『図らずも衆議院議員として活動することになった。三代半ばにして突如レギュラーで試合に出ることになったプロ野球選手』の気分である。活躍の機会を与えられたのは有難いが、「現役」を続けられる期間はその長くない。一切の綺麗事抜きに「日本を豊かに、強く」することを目指す日本保守党の一員として短期決戦、全力で駆け抜ける所存である。日本は勤勉で思いやり深い文化を培ってきた。国土面積は世界六十一位と中規模だが、領海から排他的経済水域（EEZ）まで入れれば世界六位の広さ



を持つアジア太平洋の大国である。潜在経済力も無限に近い。しかし特に近年、『欧米の失敗を周回遅れで猿真似する』自称エリートたちによって、日本は様々な面で自縄自縛に陥っている。国を衰退させつつ、自分たちのみ利権を得る、ややきつい言い方をすれば「二十四時間国を売る、許され

ざる者たち」が大手を振って歩いている。あるいは裏舞台で日々小策を弄している。本書では、日本を正道にに戻し、その潜在力を解放するため、呆れ、怒りを覚えざるを得ない実態を実名入力で明らかにし、厳しく批判した。あわせて具体的な処方箋も提示したつもりである。...

《まえがきから》

【「ひな飾り」におもふ】

今年も拝殿に「ひな飾り」が設置されました。



た。両脇には奉納された「玉の吊し飾り」も置かれ、一段と華やかとなりました。

数年前には近隣の子供が参加し紙芝居などの催しが行はれておりましたが、近年は参詣者の増加と少子化の関係か、このやうな行事ができなくなりました。

境内が子供たちで賑はつて欲しいのですが、残念ながら期待できさうにもありません。

政府の少子化対策も一向に効果がなく、それどころか、若者の未婚化も一段と進行している状況です。

本年は巳年でもあり、多くの参詣者で賑はひましたが、このご縁を機に様々な祭典にも参列して貰へるやう呼びかけて参りたく思つて居ります。



上の写真は平成二十九年に行はれた「ひな祭の集ひ」の様子です。

この時には五十二名の子ども達で賑はひました。

【祈年祭】二月十七日（月）

寒風の中十八名の参列を得て、今年の祈年祭が斎行されました。巳の日でもあり例年より多くの参列がありました。

祭典後には宮司から次のやうな講和がありました。

わが国は三大神勅の「豊葦原の瑞穂の国」や、「斎庭の神勅」に見られるやうに、稲作の国であります。しかし、今の日本は「米不足」や「米価の高騰」そして、里山には稲田の風景ではなく、「耕作放棄地」やソーラパネルが至る所に設置される等、まったく違つた国になつてをります。この様な状況を改善するのが政治家の役割であると思ふのですが、残念ながら、期待できさうもありません。将に「悲劇」であります。一部の悪徳業者による買ひ占めを防ぐのが政府の仕事です。今や、国民が声をあげなければならぬ秋ではないでせうか。穏やかな国民性も平穏時なら良いのですが、今は内外ともに「危機」のときであります。草莽崛起の語が浮かんできます。